九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

小澤正明著『川端康成文芸の世界』

狩野, 啓子
筑紫女学園短期大学助教授

https://doi.org/10.15017/12069

出版情報：語文研究. 50, pp.59-62, 1980-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

紹介

小澤正明著『川端康成文芸の世界』

狩野啓子

本書は、多年日本文芸学の立場から主として近代文学研究を進めてこられた小澤正明氏が、研究対象を川端康成の諸作品に定め、縦横にその文芸性を解明した力篇である。序章に、一「文学」の概念、二「國文學」の実体と日本文芸学の成立、三作品論の意義、の各節を置き、一では現在通用している「文学」の概念を土居光知氏から阿部知二氏の説まで通観し、二では明治以降の国文学研究の歩みを辿った上で、日本文芸学会創立趣意書の中の〈国語国文学という言葉を解体して日本文献学と日本語学と日本文芸学の三つの学的世界を認識し、これらの学問を中心として研究する学会が、日本文献学会と日本語学会と日本文芸学会として新しく創立されることを希望しております。〉という言葉を引用し、御自分の立場を表明しておられる。三では、〈「作品論か作家論か」に関し、積極的には作品論を推進するが、かつ消極的には、所謂「作家論」なる形式を否定しながらも、「作家論」の内容の一部に就いては、文芸性尊重の立前から、これを作品論の中に還元せしめて行く〉という方向を示し、現行の種々の作品論を検討した上で、従来の形式による方法には、〈それが曖昧なるが故に、文芸性尊重の立前から、肯定できないものが多い〉との判断を下しておられる。文芸性尊重という立場からは、究極的には作品論に赴くべきであるという著者の主張の根拠は、〈作品が誕生した時、思想は形象化されて思想性となり、感情は形象化されて情緒性となって文芸性を形造っている。この思想とは、具体的に言えば、その作品の作者に当る人間——作家の、思想であり、感情も亦、具体的には、その作品を創造した人間の感情に当る。作品となった時、それらが思想性となり情緒性となって、作品の中に止揚される。このようにして形成された文芸性が、文芸学の対象となって論ぜられるのであるから、その意味では、「作品論」は文芸学の重要にして基本的方法の所産であると言える。〉という所に求められる。

日本文芸学に疎い筆者に取っては、序章の要を得た解説は誠に有難かった。数年前、日本近代文学会に端を発し、かなりの範囲に亙

って波紋を広げた文学研究における方法論論争は、記憶に新しい。その発端となったシンポジウムの席で、実証主義というよりは寧ろ論証主義の立場に立つ谷沢永一氏が、作品論に関して、〈まったくの資料なしで、あるいは論拠というべきものをそこに求めないで、その作品の内部だけから議論をするということを、むしろそれこそが私は本当の作品論ではないかと思います。〉とその理想を述べ、〈世に作品論ともてはやされておるものは、じつはそうではなくて、作品を論じるといいながら、ほしいまま、勝手気儘に外部から、自分の好き好みの材料を裏口から引き込んできて、その上に乗っかっているから、私はそういうものは作品論だと思わないわけでありまして、その作品に書かれている言葉以外の一切のデータを論拠に使用しないで作品論を築き上げることができれば、つまりそういうことができる作品というものは数が限定されるでしょうが、それこそがいわば方法論的な作品論だと、そういえるのではないかと私は思います。〉と敷衍された。一方、文芸評論家の磯田光一氏は、最近文献学の軽視や主観の恣意的傾向が強いことを指摘され、〈人間の主観というものは、自分で信じているほど堅固なものではないのであって、むしろ客観的な何ものかによって検証されて、その検証された過程に現われるネガティブな主観のほうがむしろ信じるに足りるのではないか。〉と論じ、荒正人氏の『漱石研究年表』を、そのような研究の例として挙げられた。それらの論議と著者の御説とはどのように切り結ぶのであろうかと想を回らした次第である。

※　※　※　※　※　※

本論　川端康成文芸の世界　の目次をまず紹介しよう。

第一章　川端文芸に於ける「新感覚派」的感受性（其の一）
——「抒情歌」研究——
一　標題の意義
二　「抒情歌」の主題
三　「抒情歌」の構想
四　「抒情歌」の作品構造
五　「抒情歌」の美的形象性
第二章　川端文芸に於ける「新感覚派」的感受性（其の二）
——「水晶幻想」研究——
一　作品構造
二　主題と構想
三　美的形象性
第三章　川端文芸に於ける情緒性
——『千羽鶴』研究——
一　『千羽鶴』研究の一方法
二　登場人物・美術品等と人間像
三　『千羽鶴』の文芸構造と主題
四　『千羽鶴』の美
第四章　川端文芸に於ける短篇的発想法
——「招魂祭一景」研究——
一　「短い」表現
二　「招魂祭一景」外在面の調査
三　詩と短篇小説との切点
四　「招魂祭一景」の短篇的発想法

五　「招魂祭一景」の文芸構造及び主題
六　「写生」の妙味
第五章　抒情性の展開
——「伊豆の踊子」研究——
一　「伊豆の踊子」の主眼
二　用語「美しい」
三　「涙」と孤独観
四　人物像「踊子」
五　叙景表現
六　「伊豆の踊子」の主題
第六章　人間性の純粋化
——「雪國」研究——
一　「駒子」と「葉子」の対照と「島村」の座
二　背景としての雪國
三　『雪國』の作品構成手法
四　「徒労」と人間性
五　「雪中火事」と作品の統一性
第七章　日本浪漫性の昇華
——「山の音」研究——
一　『山の音』の作品構成
二　『山の音』の作品構造
三　「連歌」的手法による作品展開
四　『山の音』主題の解明
五　日本浪漫性の昇華
第八章　川端文芸の特異性とその体系

以上の本論を一貫する著者の基本的姿勢は、〈本論は、作品研究を中心としてその文芸性究明を実践しようとしたものであり、その具体的方法としては、作品の文芸構造、構想、主題を念頭に置きながら常に作品から離れることのないよう意を注いだ。〉（序章）という言葉により知ることができる。作品に登場する人間像を重視するに止まらず、場合によっては他に中心を置き、〈美的形象性〉を究めようとされるものである。夫々の作品を、如何なる独特の文芸性を持つものとして捉えるかは、各章の章題に端的に示されているが、さらに最終章が本論の総括として置かれており、まず第一章で取り扱った問題については次のように述べられる。〈川端文芸の特質は、まず、「抒情歌」と「水晶幻想」などに顕著である「感受性」による。ここに「感受性」と称ぶところは、感情の芸術化されたものを指すことばではなく、感覚が芸術化された感覚性自体を指すものでもない。感情のみならず、思想が芸術化される過程に於いても作用するところの、感覚の働きを指すと同時に、むしろ、このような感覚の作用によって芸術化された、芸術性としての内容の要因を指すのである。〉そしてこの「感受性」は、「新感覚派」の特色の一つであるという。〈「様式論」による諸派様式の中の「新感覚派」というよりは、個の作品の内蔵する文芸性を究明して行った結果帰納的にその特異性を認め得たところから、「新感覚派」的なるものと称び得るものである。〉次に、これに連らなる特色として「浪漫性」を挙げられる。例えば「山の音」の文芸性は、〈「連歌」的構成手法による日本浪漫性の現代的昇華〉に在るとし、さらに「伊豆の踊子」の〈旅情〉〈浪漫的感動〉は「抒情性」という言葉により

位置づけられている。「千羽鶴」に於いては、〈「志野の筒茶碗」の永劫の美を、かつ揚げかつ棄てて之と比較するかと思えば、「稲村ゆき子」に化身した白い千羽鶴の美をその対照として描きながら、「太田夫人」の「菊治」への官能と情愛がいよいよ昂められて行くという文芸構造の中に、日本固有の「物語」や「俳諧」の境地を止揚した現代的情緒の世界が、纏綿と繰り展げられて行く。〉その中に示現される文芸性は「情緒性」である。「雪國」に至っては、一つの特異性が強力に発輝されているのではなく、川端文芸全体を覆うもので、〈人間性を純粋化する文芸の神髄を示現している〉作品であるとされる。最後に「招魂祭一景」に関しては、短篇小説であるが故に、〈背景が作品に融けこみながら主題による文芸展開に重要な役割を果た〉すこと、そのために〈「ことば」を駆使する芸の巧さ〉が厳しく求められること、或いは〈時間的に、過去――現在――未来に亘る縦に長い流れを、瞬間的な現在の一点に截った断面上に凝集させる技巧も、必要不可欠である〉こと、以上のような条件を見事に具備した作品であることを述べられ、しかもこの種の発想法は、他の作品にも共通するものであり、〈その体系のすべてに関わるものであろう。〉と指摘されている。

以上、第八章は正に本論の要諦であり、各作品別に詳しく考察を加えられた特異性を、さらに大きな川端文芸の体系という巨視的視点から関連づけられたものである。ここで謂わばキーワードとして用いられている「感受性」「日本浪漫性」というような言葉は、著者の懇切な説明が為されているにも拘らず筆者には咀嚼しきれない感が残り、自身の不勉強を憾んだのである。浅学故の初歩的な疑問を一、二挙げさせて戴くと、一つは、テキストの問題である。著者の言われる〈文芸以外〉の問題は措くとしても、文芸性の価値認識にも関わるテキストの決定については、どのように理解したらよいのであろうか。又、〈文芸以前〉〈文芸以外〉を取り扱ったものも含めると、先行研究も夥しい訳で、著者が潔癖にそれらへの言及を自ら戒め、一つの自己完結した世界としてこの書を提出しておられることは了解できるのであるが、川端研究に暗い者に取っては、研究史或いは現在の研究動向を簡単にでも教えて戴けると、本書の独自性をより明確に認識できたのではないかと思われる。しかしながら本論は見事に論理的に整合された統一的世界であり、読後、川端康成の文学の芸術性を堪能させられた感を覚えるのは、筆者一人には止まるまい。

（昭和五十五年三月　桜楓社刊　二〇一頁　二、八〇〇円）